水滸傳 水之巻一 四

太政官文庫
和書門
一二五八六獅
一一七七函
七架

内閣文庫
和書
一一五八六號
類
七冊
二七七函
一七架

内閣文庫
番號 和 11586
冊數 7 (4)
函號 207 343

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

水火傳　水之巻一

○ト相布手麻通御靈知天地人同靈御傳

天地の正中に一ちゝ其御靈⊙賀是天之御中主神の御靈ゝ其
凝ゝ水火別ゝ水ゝ輕ゝ昇ゝ天ゝ掌其御靈⊥賀是伊邪那
美の御靈ゝ火ゝ重ゝ降ゝ地ゝ掌其御靈⊖賀是伊邪岐の
御靈那ゝ是ゝ天地の躰ゝ然ゝ其水火動ゝ火の御靈ゝ昇ゝ天
ゝ日月星ゝ水の靈ゝ降ゝ地ゝ山海ゝ現兩神の水火典ゝ入及
萬物ゝ產是ゝ天地の活用ゝ其嗅ゝ御靈⊕賀是其水火萬物ゝ
搦ゝ御靈◎賀是高御產巢日神神產巢日神の御靈ゝ
○人の胎内の正中に一の凝ゝ其御靈⊙賀是天之御中主神の御靈那

其凝りて水火別て水の氣を輕て筋骨の穴を昇て其御靈(一)
賀是伊邪那美の御靈を火の氣を宣て筋骨の穴を降て其靈(一)
賀是伊邪那岐の御靈を是を氣の躰を生て歯を生て口中を更那て
毛を息て生て故て眼耳鼻口
総て穴を息出所を別て毛多 賀是出息を吐入息を天
地の氣を天人の氣を天地の氣を已て息て與を言與を子を産
是を氣の活用を其與を御靈(十)賀是亦其水火搦て御靈(◎)賀是
高御産巣日神神産巣日神の御靈を肉中の搦を筋を此神靈那を
○草木の正中を火の凝を火を搦を是を其御靈(⊙)賀是則天之御中主の御
靈那を其を水火別て水の靈を搦昇て枝の穴を傳葉の筋を傳て
昇て其御靈(一)賀是伊邪那美の御靈を葉の尖を水の活用を鋸の

賀を草木の歯を爪を夢草を搦て火の靈を穴を傳て根を降る
其御靈(一)賀是伊邪那岐の御靈を穴を傳て水火昇て葉を毛を生て氣
を吐降て根を毛を生て地氣を天人草木の呼吸を則是那て天言次
草木を音を地を離を天地を氣を搦て其御靈(◎)賀是高御産
巣日神神産巣日神の御靈を木目を則是を賀是搦て天地の氣
を氣を花咲實天地の氣昇て葉を右を向天地の氣を知て人を
故て草の中を赤右
賢故陽の末を知て芽を現て陽の潛を知て萬葉を
附て此草木(十)賀是の御靈を
変名を無の謂を

○井靈搦天地人御傳

○天の正中を火の凝を地の正中を火の凝を人の正中を火の凝を其御靈(⊙)
賀是御名を前を在天の中を天人を地の中を地人を人の中を人人を名其凝を

水火別る天の凝り別る火の実を火水と現る那り地の凝り別る火の実を
水火を潜る是を地中の井の実を人の凝り別る火の実を骨
を毛天の凝り別る水の実を水火を蒼空を現す是を天井
の実を水水の実を地の凝り別る水の実を水火水を地球を同る是を
海中の井の実を人の凝り別る水の実を水火水を絶身を搦る
同る是を胎内の井の実を人を然る天在井の水を天心を搦る同る甚御実
◎賀是高御産巣神。神産巣神の御実を毛地在井の水を地心を搦る
同る甚御実◎賀是神名同上人を在井の水を人心を搦る同る甚御実◎賀是神名同上
天地人相對る井の実の備る向る字音の井屋青性毒同意故海水の青を天の青
を月代の青草木の青を天色の青を天地萬物同実を然る天雨
を催時を雲を波の形を現る月を○水の暈を現る海水を濁を現る波を竜を

人の乳血濁を皆を故を天を指て雲井井を僧字を雲を雲懸蒼
天の形を紫用を雲居を此天井天を五色を現る地を草木を生る毛草木を
を花を紅白を現る海を鱗を現る人を毛
を生る毛を皇白を現る容顔の醜実を此御実を發井の実備る賀
附る人天を在天井の青を鹽の名を故を毛空色を人天の井の夕日を赤
を向クレナ井の名を故を且る天井を毛ヒ少レの反べを又井の反ニを
べニを名を故を且る天井の黄を則日夕天井を則朝氣を
毛浅黄を濁を空色を毛アサギを唱を耳を天井の濃青を五日夕を暗を
黒の名を故る日中を天井の白を毛ニ早の名を故る白日を五色を天色の天
井の色を初を五の色を合を六の実サキを割を
六を五を割別を五の色を名を甚五の色を縁を毛幷の色を
五色を天の服色を人小天地を同色を服す紫を天色の紫を
を故を高官の服色を

○人を井の水の実搦を三ツ自カラダを井搦の実を搦実の式
を井の搦を毛を毛を毛を人命を露を喩を井の実を毛の故を此井を

毛を生ず同毛を初め此所にウヰ井にして則頭井の霊にして頭に井の御霊在
の故に其御形◎如是神御名前に在故髪置に此所にて天窓唱
天霊の霊那にして鳥帽子冠を載或紫髪曾或梅を
櫛頭髪を櫛頭或仏形鬢に紙を餝に皆天の神霊を囲各の
摺に既に神に向て夕ケに霊向の霊に己に御霊を神の御霊に
向に時頭の御◎に向合の義那に手向に書に神に向時
に鳴其訣を鈴に則御霊に人善を思じ御霊善に郷音の理に此鈴を
鳴に向にスズに名にススキ稲己に穢にススクに五十鈴川に
いに五に洒川に名那に文字音も霊鈴に礼の同音に自然の霊合那
○井の御◎に頭に備に手足の指に備る指の頭に偏巻有筋に則此御霊也頭に天の御霊を載
足に地の御霊に踏に身に其中正に在に人道に其中に柄故に鳥獣

鳴時に天地の水火に動人言時に天地の水火に動て五音に応水火音に響
て他音に知て五悪を思て氣に郷て他悪に知て五
秘に天地の氣秘に水火に生て死に無に有に臭水中に
在て水に知て人水火の中に在て氣に知て鳥の空中に翔て臭の霧に同水火の故に

大圓に天に小圓に地に人躰に正中の黒に星に
天心地心人心に同の五十連の假名に天地人の氣に則
日月に
大圓の中の四筋に天の井の霊に日月星陰陽の運形也
地に在て海中の井の霊に汐の同形に
小圓の中の四筋に土中の井の霊に人に在て肉中の
井の霊に五十の同形に

此御霊の日月星陰陽運に天心地心に動て正中の天心に天之
御中主神に漢國に是に北辰に故に文字に音の神心辰の同音に

天地間の靈氣天地の陰陽に感じて動き
一心の心動く詞を天心地心父母の心を動き
○小國國土を大國を潮を故正中の國土を指て井中の井の靈の搦
甚活用の靈を形り唐井の靈の搦中を指の唱正中の心を君
王宮を同の筋の井を臣を井の靈同を國土を搦を臣圍を王宮を
守護是を九重を甚御靈◎如是故天皇の在所を御井を紐大殿の
地を指を形を居る人詞を人の在所井の靈との唱
附て萬葉の藤原御井五十師の御井を則是を藤原の毒
御井向清水を見て文字を泥を堀井の東を大を環を
天皇の御屋の清御井の毒を詞を五十師の御井の毒を山思乃
五十師御井自然成錦年張流山可毎を堀井を花紅葉の錦を張る
五十師の大殿を四時花紅葉を御殿の
詞を詞の詞を
○神の御社井の靈を神門井を境内を井の靈の搦同の唱を瑞籬三カキ

井垣の靈タマカキを井垣の靈を社の同を井の靈の搦を名
を凡人の家を井の靈備を同を敷井鴨井を井の靈を
溝の唱を天井を上を天の井の靈を名形を堂塔を天井を九龍を
画を井の水の渦巻の形を後世の人呂の鱔龍を国を
壁を井の形を與を見る古画を跡を如是総を戸障子
○是自然と靈の備を
○地中を井の靈の鳴動を地震十井を鳴を地中の井の鳴動を形を海中の
井の靈の鳴動を波十を鳴を氷を各井の靈の動を形を故震
の動を波を溶を然を震を地を動を海水を動を只
東を波を動を地を動を呂東を
附て古昔何人の説を毒を鱔を毒地の下を鱔を毒を動を震を
地中の井の鳴交を総の毒の名を助言を省を同を全の毒を
益學の者を教を比百世を眼を井の靈を眼を見る鱔を

○海山の形をなすこと天地の初發の凝りなり水火別て輕澄水火を昇て天
の柳なる然り火の昇て日と現水の昇て月と現亦重濁なる水火の場を割別
て火の昇て土となる中異を伝水の昇て潮となる外を擲其割別る場
の高低初て水上に現て洲となる瀬なる那て亦甚潮水なる清濁別て澄て
天に昇て雨となる濁て降て汐となる甚潮て濁て逆て瀬て洲
なる洲て山となる高水愈低天愈高地愈低天地の氣定て軽水上に出
なる山なる羊水中に藏て海なる（今山の項に見るなる京海中なる故なる日向の国
伊勢国貝石山等那）（肥州信州安曇陸奥鹿角上総国集城州深草山
其外諸国に在不可枚挙）故に世界萬國皆なる續連て地脉を離ざるなる山高所なる海
必深（富士山在なる七十余里海中）山の低所なる海必淺（雞波住吉等なる以知）海中の深淺を計て必山なる知る
亦海の底に皆なる山なる船なる甚なる漕なる岩なる漕る
○汐の満干なる地中の水火なる海中の水火なる呼吸なる故那なる地中の水火

海中なる吹なる出息なる汐満亦海中の水火地中なる入なる引息なる汐
干地中の井の昇なる海中の井の昇なる動なる息なる那なる（日月の運行なる天地の水火なる故なる汐の満干なる月の盈虛同）
地なる南面なる呼吸なる故なる汐の満干なる南海なる正なる北海なる正なる三月なる
一行の息なる當なる汐なる干那なる既なる沖なる息なる波なる海中の水火
の列なる辛なる火なる流なる水なる波の渦巻なる水中の火の焔なる故なる火氣陰中
潛なる冬南海なる波静なる北海なる波高火氣陽なる現なる時なる夏南海波
高なる北海なる静なる海中の井岩なる如是天氣なる吹なる雨なる降地氣なる
吹なる露なる現人息なる吹なる濡なる一なる
○天地の水火なる動なる故なる水なる溶なる風なる動なる吹那
水火動なる動なる萬物生故なる山の間なる邑里なる田畠疇なる五
穀なる水溶なる浮草なる生なる人及鳥獸なる氣なる動なる孕天

地の間四海の底まても動くの軽きもの故に今日も昨日の如く此今年年
の如く此家の盛衰人の浮沈皆天道の水火に従て動の故に浮ては誘
へて沉ては誘へて

○相御霊開闢水火知為今日傳

傍て五十連の根名を其起の次第を合て見給へ

○夜の八時に晝夜の◎に陰の凝に七時に至て伊邪那岐伊邪那美
の二神の凝の水の霊い起其神霊◎如是然て右に今日起の才の霊を
に左に今日終の才の霊に次く脹のへの霊起て火浮右に天の
暗中の胞衣の工の霊に左に地の暗中の胞衣の工の霊の中に一の霊起
ハ吹右に浮動の一の霊に左に空浮昇左に渦巻沉の一の霊に起て
東雲に既に海山の文目分に上の霊起て自に現右に出氣の一の霊に
に進昇次に三の霊の月に左に引水火の井の霊に西に傾次に月放の

八の霊起て月に左に地を掌の一の霊に沉日に右に天を掌の一の霊
に高昇て其神霊◎水氣一重減火氣進て明六時に次に天の氣の一に地の
氣の一に文に與に十一に二に入陰起て其神霊◎如是水氣二重減火氣弦進て
五時に次に出陰の正中に掌に八に又二十に起て澄昇ホラルルに口に
起て溺水引陰に擬て降て其神霊●如是水氣三重減火氣増進て四時に次に其
引陰陽の火の氣澄昇て コケノキカに起て自暉伊邪那岐神掌に其神霊
●如是火氣盛に現て水氣更に昇て是九時に故に萬物の影斜に其照暉に従
地に ソセスシサに水氣起て共に昇伊邪那美神掌に其神霊○如是水氣
始て起也是八時に此二時に●大○水和合に陰陽盛に次に七時に伊邪
那岐神掌に タナツテト水中の火に降其神霊●如是火氣衰也既に西に傾
に其傾に従て伊邪那美の御霊火中の○水のマ行に起て夕行の●火に與舫

其船の王の炁起て●火○水中に入て日四陰次て水火同の〆の炁起てムの炁起て空斬日無ちて次て三の炁の月東マの炁起て圓て現て是暮六時那て●火○陰中に収て其神炁◉賀是て月明て炁て刻々に火の氣潛て水氣現五時に至て其神炁◎賀是水氣二童て火氣次第に潛四時に至て其神炁◎賀是水氣三童て火氣彌潛て九時に至て其神炁◎賀是水氣四童て火氣大に潛也然て八時に至て火の炁胞衣の中に収て見て其神炁◎賀是烏王の暗て一日終て赤曉に至て現故に天道て日々に終て赤日々に新那て

○開闢水火知爲二月傳

○三十日て一月て唱て訣て三て月の炁て祢て故月の盈虧て三十日の間て有て月て二十日て晦日三日て朦て三日暗中て月の竜て入て暗中の胞衣に入て三十日の◎ユナて朔日の明六時に崩て其

○神炁◎賀是此胞衣の中て水火八て起て三日に至て衝角其神炁◎賀是暈三童て月て日の爲て光て現て故火氣進て従て三日に至て初て三日月の名て有て日て暮六時て暗中て入初て曉七時て崩明六時て開暗中に在て五時て萌赤二時て經て開て月て暗中に在て三時て萌赤三日て經て開那て日て火て速月て水て遲四日五日て陰て陽アイウエオ才て陰陽右て開六日七日に至て四井ウエオ才て陰陽左て開八日九日の至て其三行て文て文て ヤイユエヨて文息て其神炁◉賀是暈三童て形次第て盈十日十一日に至て八十又二十て出陰陽の中て登昇十二日十三日に至てラリルレロて文陰陽て撥て閉水降其神炁◉賀是暈一童て形彌盈十四日十五日に至て火氣上て進てコケソキカて起伊邪那岐神宰て其神炁◉賀是暈更て無て月十分て盈て十六日十七日に至て火氣進て従て水

氣共ニ進ミソセスシサ起伊邪那美神字ミ其神子○賀是二神の
○●和ミ此二日ミ月共圓ミ十九日ニ至ミ其和ミ從ミ伊邪那岐の火の
子ミ水中の火ミ那ミを夕十ツテトと起ミ降其神子●賀是二十日二十日ニ至
ミ伊邪那美の水の子火中の水ミ生ミ モメムミマ起昇然ミ二柱の水火與
觸ミ其神子●賀是火の氣水中ニ入暈ミ暗夫ミ次第ニ暈と
ミ二十二日二十三日ニ至ミ其神子◎賀是暈二重ミ暗二十四日廿五日
ミ至ミ其神子◎賀是暈三重ミ暗二十六日二十七日ニ至ミ其神子
◎賀是暈四重ミ彌暗夫ミ二十八日二十九日三十日次第ニ月胞衣の中ま
潛ミ黑暗ミ生ミ其神子◎賀是丈氣陰中ニ入ミ不見然ミ赤胎の如き崩
○開闢水火爲手傳
○水火の二手ミ生ミ大暗の◎の中ニ入ミ水の子崩其神子◎賀是

ミ水ハフヒハ起ミ元日ミ生ミ生ミ生ミ アイウエオと開起ミ晴月ミ生ミ
ムツキ ミ メクの反ミ生ミ陽氣惠ミ草木 本語
芽ミ芽の如ミ故ミ睦月ミ文字を借也左ウ井ウエオと起開ミ如月ミ生ミ
キサラツキ ミ ミ ミ ツミ省ミ キサラキ ミ云言ミ ミ ミ氣ミ ミ サラの サを則割別ミ ミ ミ
天地の氣ミ割別月ミ ミ多ミ ミ於 通穂狹 別ミ當ミ ミ如月ミ文字を借ミ ミ ミ
此ツ行のツミ則○の氣ミ ミ故ミ 本語
○ミ則月の如ミ ミ文字を借也今日ミ ミ謂ミ明六時ミ當ミ其神子◎賀是
次ミ陰陽惠睦月ミ陰陽割別賀月の二ミ文ミ入陰陽のヤイユエヨ起ミ
彌生ミ生ヤヨヒ ミ ミ ミ出入息の二ミ字ミ ミ陰陽ミ知月ミ ミ名
當月ミ ミ ミ ミ ミ故ミ穂ミ酵ミ彌生ミ ミ彌生の文字を借ミ引陰陽ミ
似大ミ ミ ミ ミ ミ今日ミ ミ謂ミ五時ミ當ミ其神子◎賀是陰退ミ暈二
黑圓 太也次ミ其與陰陽の正中ミ澄昇ミ ノ子又二十ミ起ミ卯月ミ ミ ま
彌生ミ生ミ ミ ミ苗ミ の反ミ ミ
撥月ミ ミ ミ ミ卯借字次ミ陰陽ミ撥ミフリルレロ濁水降ミ皐月ミ ミ ま
サツキミ ミ ミ ミ ミ細ミ ミ ミ ミ醗水の子ミ ミ ミ ミ ミ月ミ ミ細ミ ミ兩の醗月ミ ミ名ミ ミサツキの ミ
ミ約ミ ミ サツキミ唱ミ ミ ミ ミ五月雨ミ ミ ミ ミ ミ ミ細ミ ミ ミ ミ無ミ ミ ミ細ミ ミ ミ水の
醗ミ ミ ミ ミ ミ ミ則ミ行の ミ ミ ミ ミ ミ ミ

暈一重なり陽進て黒圓炬
故に此兩月なれども夏なり那す 次に其濕水降て從て火の氣上て進てコケノキカ越て
昇て伊邪那岐神宇て水無月なり今日なれば謂て九時に當て其神●賀是
水無月に文字の如くなれば知て皇月に濕水降
天に水の無月に名なり此御靈に暈無ければ陽氣昌なり知
なれば從て水氣下なれば起て伊邪那美神宇てソセスシサて進昇て今日を
なれば謂て八時に當て其神○賀是水氣秋なれば現て也兩神の○和合て文月を
なり文月の本語にフフミの約なれば二神の氣なれば稲に花咲合て月の名なり
故に七夕に星合なれば則伊邪那岐伊邪那美の二柱なれば文月の文山を借
て天地の水火文を借也然て伊邪那岐の御靈に水中の火に那て夕千ツテと種を
降て葉月なり今日なれば謂て七時なれば葉月の八に朱の通音に穂の出月の名なれば葉月なり其
火の靈降に從て伊邪那美の御靈火中の水なれば モメムミマに昇●火の氣○中に
収て稲實なれば其御靈●賀是今日なれば謂て暮六時なれば長月なり那に
ナカ月に本語にイナカリ月なれば起言て省て助言て省
ナガ月に文字に借て長月なれば秋の夜の長の為に借也夫て陰の氣陽に

包て又の名なり フユ に那て故に水氣外に現て火氣内に潛なれば時雨を
水中暖なれば 亦神無月なり 陽氣陰中に潛 則陽無月なり 亦玄猪なり 井に則天地人に備て井の靈
凝なれば井のコに故に凝なれば火水共に
風列に萬物乾也其御靈●賀是 水氣火を包 ニ重に今日なれば謂て夜の五時に當
なれば其玄猪の井の靈凝て水なれば霜月なり 霜降月なり 其御靈●賀是 水氣
火を包て三重に故に寒 今日なれば謂て夜の四時に當て井の靈是凝て師走なり
今日なれば謂て夜九時に當て其御靈◎賀是 水氣四重に文寒なれば
ワスに唱てワに輪に水氣凝て○なれば雪霰に現て海中の井の靈凝て雪霰の降月に名なり空中
の井の靈凝て塩なれば雪に塩に同靈なれば
に其形雪 赤塩の 然て大晦日の八時の◎に収て赤玉年暁の に現て

○開闢水火爲稲傳

○籾一粒を水中に浸て◎の中に赤の靈崩其神靈◎賀是然て右に
起の才の靈なれば左に終の才の靈なれば次に靈起て脹種の脹 那に 右に 袍衣の

エの灵ちち 穰 左ち 胞衣 搦の エの灵ちち 殼 其胞衣の中ち 水火吹別む
ちち フの灵起ち吹右ち 浮昇のウの灵ちち根ち上ち出ち芽左ち渦巻隋の
ウの灵ちち ち根ち下ち土ち生然ち ヒの灵ち左ち 水火の井の臭ち ち三の
灵ち右ち出水火のイの灵ち ち次ハの灵起ち左右ちアの灵ちワの灵ち發ち二
葉ちちち 伊邪那岐伊邪那美の二柱ち 其神灵◎ 賀是次ちアワの二灵ち交ちヤイユエヨち
入息起ち 彌生其神灵◎ 賀是次ちノアヲ又二十ち出氣の中ち澄昇 此時卯月ち植也
次ちラリルレロち入氣ち 搦ち 湧水降 五月雨ち 其神灵◎ 賀是次ち其降ち從ち
伊邪那岐の御灵コケクキカち起ち火氣上ち進ち昌ち 六月ち當陽ち 葉ち育ち 其御
灵● 賀是次ち伊邪那美御灵ソセスシサち起ち水氣根ち昇ち其御灵◎
賀是次ち水火和合ち花咲 文月ち當ち 次ち火の灵ち水中の火ち形ち タチツテ
トち降 葉月ち當ち 水の灵ち火中の水ち ち モムミメち露ち ち ち昇ち其つ

四ノ十

與 舫ち 実其神灵◎ 賀是 長月ち 昇ち 水火ち合ち 稲 事ち ち ち 降 水氣下ち 其実ち從ち
胞衣次第ち 搦ち其神灵◎ 賀是 実ち從ち 穰 三重ち ち ち 赤◎ 賀是 穰 三重ち ち ち 赤◎ 賀
全實ち 稲苅収ち ち 此御灵の中の黒固ち宋ち ち正中の白ち仁中ち ち回の節ち
三節ち 又ち ち ち 外の一重
籾の殼ち ち中の三重ち 穰ち 日ち己ち 陰ち 一命ち 緒ち 四重ち ち 外の一重
穰の ち ち ち 知 喰人少ー 此御灵の傳貴ち ち ち ち 可知 是ち赤翌年水ち 浸ち其◎
の中ち ち ち 現ち ち ち

○開闢水火爲人之今自傳

○人ハ夜の八時ち至ち眠ち ち息本元の胞衣ち收の故ち ち寢入ち ち息の
至ち◎の中ち ち ち ち ち赤の灵萌其神灵◎ 賀是右ち起の才の灵ち左ち終の才の灵
ち ち次ち息脹のヘの灵起ち右ち眠の胞衣の エの灵ち左ち眠ち 搦胞衣の エの灵
の中ち ち息出ち ち ち フの灵起ち吹右ち浮昇のウの灵起ち身ち右ち ち動左ち
渦巻降のウの灵ち 鶏ち左ち寢交ち現ち ち次ち火の灵のヒち左の眼ち寧ち

引氣の井の灵ゝゝゝゝゝ睡の下ゝ佇ゝ水の灵の三ゝ右の眼を掌ゝ出氣のイの
灵ゝゝゝゝゝ睡の上ゝ佇ゝ次ゝ八の灵起ゝ左右ゝアゝウゝ發ゝ二柱 伊邪那岐神 伊邪那美神
現ゝ眼覺則明六時ゝゝゝ其神灵◎賀是次ゝ五時ゝ至ゝ其アウの三灵ゝ
文ゝゝ胎内ゝヤイユエヨ起ゝ文息定其神灵◎賀是次ゝ四時ゝ至ゝ
又二十ゝ起ゝ出息の中ゝ澄昇ゝ赤ニアリルレロ入息ゝ搦ゝ濁水降息の出入
正ゝゝ其神灵◎賀是次ゝ九時ゝ至ゝ伊邪那岐の火の灵コケクキカ起て
氣力昌ゝゝゝ其神灵●知是次ゝ八時ゝ至ゝ伊邪那美の水の灵ソセスシ
サゝ起ゝ胎内ゝ昇ゝ其神灵○賀是甚岡神の水火和ゝゝ氣力赤昌ゝゝ次
七時ゝ至ゝ甚○●和合ゝ伊邪那岐の御灵ゝ水中の火ゝ祈ゝゝゝ夕チツテトト
胎内ゝ降ゝ故ゝ氣力弱ゝ潛ゝゝ次ゝ暮六時ゝゝ至ゝ伊邪那美の御灵ゝ
火中の水ゝ祈ゝゝモメムミマ起ゝ與舫●の氣○の中ゝ收ゝ其神灵◎賀是

故ゝ心潛ゝ眼暗 日暮ゝ暗ゝゝゝゝ思ハヽ 已ゝ眼ゝ共ゝ暗ゝゝゝゝ可知 夫ゝゝ刻ゝ陽氣陰中ゝ潛氣も
共ゝ潛ゝゝゝ夜の五時ゝ至ゝ神灵◎賀是 陰ゝ氣二重ゝゝゝ陽ゝ氣の 黑圍刻ゝゝ潛ゝ見合ゝ可知 四時ゝ至ゝ神灵
潛ゝ根ハ其神灵◎賀是 同の筋ゝ眼の胞衣ゝゝ三節ゝ見ゆゝゝ黑圍の陰ゝ一節ゝゝ後ゝ 陽ゝ氣の 四節ゝゝ黑圍ゝゝ自ゝゝ搦ゝゝ黑圍ゝゝ烏玉ゝゝ其正中ゝゝ 賀是八時ゝ至ゝ氣胞衣の中ゝ
自ゝゝ息ゝゝ此黑圍の中ゝ同ゝ息ゝ
夢ゝゝゝゝゝ息メゝゝ同ゝゝゝゝ息の同ゝゝゝ 然て赤曉のゝゝ眼覺ゝゝゝ
陰ゝゝゝ水火 眼覺も 睡ゝ 閉水火根ゝハ時ゝ 二華ゝゝ合草木の眼ゝゝ華ゝ次ゝ知 左右半知是ゝゝゝ能合ゝ眼一ゝ巻オノコロ島ゝ合ゝ可知

○開闢水火爲齡傳

○人母胎の◎の中ゝゝゝホの灵起ゝ右ゝ起の才の灵ゝゝ左ゝ終の才の灵ゝ茲ゝ
ゝゝ生時ゝ死ゝゝ知其神灵◎賀是次ゝハの灵起ゝ脹ゝゝ日ゝゝ膨ゝゝ
知ゝ右ゝ胞衣の二の灵ゝ左ゝ搦胞衣の工の灵ゝゝゝゝ母の懷ゝ抱ゝゝ知ゝ次ゝ
息吹別のフの灵ゝゝゝゝ母の懷ゝ出ゝゝ知右ゝ浮昇のウの灵ゝゝゝ右の

手々動々知々左々潟巻降の〇の霊々々々這々知次々七の
霊起々々々左の膝々屈次々三の霊起々々々右の足々伸々立々知々然々
右々出息の一の霊々々々々右の足々進左々引水大の井の霊々々々々左の足々
引々歩行々々知女子々水々々々右の足々動男子々大々々々左の足々動次々息発の八の霊起々右々一の霊
開左々一の霊々開々言々々知々是々一歳々々八歳々々の氣々其神霊◎
賀是八歳々大八島姫の数々當々人々々の氣々備の姫の義々々今日々々々謂々
明六時々當々晝夜の始々々故々人道の始々日八歳而入小学々霊合也次々九歳々十五歳々
至々々々ヤイユエヨ々々息起々々氣の文目分故々初々兒々々其神霊◎賀是
暈二重々々々陽氣弼進々々是々十五歳の氣々々十五々アヤワの三行合々十五言の数當
今日々々々謂々五時々當々此三行々水大の文分の行々々此年間々々々々
文目々知々日十有五而志于学々霊合也次々十六歳々々三十歳々々ノヲ又三十々起々出

息の正中々澄昇々次々ニラリルレロ々潟水八息々搦々降々水大清潟の
別々此行々々々今日々々々謂々四時々當々血氣上々昇々其神霊◎姫此
是々三十歳の氣々々暈一重々々々陽氣弥進也則天之御中主の御霊一心の正中々宿給
の時々々賢愚邪正の別此年間々在三十々力行々々々行々々の六行々合々
三十言の数々當々能言々語の活用々那々曰三十而立と霊合也次々三十一歳々々四十歳々
至々々々伊邪那岐の火の御霊コケノヒカ々起暉々々萬物の差別々々々其
御霊●賀是暈陽氣昌々々今日々々々謂々九時々當々是々四十歳の氣々々々
四十々力行々々ニ行々々八行合々四十言々々々々々大八島の数々當々人道々於々明
々々々々々々々曰四十而不惑々霊合々次々四十一歳々々五十歳々至々々々伊邪那美の
水の霊ソセスシサ々双起々其神霊〇賀是今日々々々謂々八時々當々兩
神の〇●和合々能脩是々五十歳の氣々々々五十々水大の五十言の数

當天地の五十の備の年那曰五十而知天命
次五十一歲
次六十歲
伊邪那岐の御子水中の火那
次七十歲
其神子●加是六十歲の氣今日
謂七時
六時
當て齡
傾
萬物の種
字六十
水火の五十言
佐言の十言
加六十言
の數當故
萬語
足
曰六十而耳順
次六十歲
モノムミマ潤水の子起
其神子○賀是然
夕行の
●の子與舫
●加是大氣水中
今日の暮六時
當故眼暗
氣力大
衰然
御子
天之御中主神在
萬物の種
養の
潤水
七十
水火の五十言
湧言の二十言
加
數
心
千言
萬語
曰七十而從心所欲不踰矩
足
次七十歲
今日の夜の五時
當其神子◎加是暈三重
天之氣減
氣力弱大
衰
次八十歲

夜の四時
當其御◎賀是暈三重
火の氣益減
氣力
大
衰
次九十歲
夜九時
當
其神◎賀是火の氣大
衰百歲
過
則八時
當
然五
御
天之御中主神の主元
歸
死
其血子◎加是
此御子の正中
血の子那
死骸
血壳の
正中
血子
水の掘
壳の子
則自の壳
其死骸
黑暗
是
烏玉の暗
然
左
終の子の子
ゝ
右
起の才の子
再人間曉
現
天地の始終
晝夜
天地晝夜
水世晝
人間死
生生
死生
晝夜
天地の水火
晝
生生
變
空
蟬の所
見
附
烏玉
又
暗
那
出入息
那
玉
子
息
魂の
暗
又八
那
夜八
時の眼
自
同
故
曉
生
烏字借
暗
玉
赤ムバ玉
ムム
暗
ウムヌ
三言皆
暗
那
總
天地人の氣の終を
字
故
佛說
子人
氣の終を
宇
夜
同
續地詞
息の終を
ウ
ウ
ウバ子
子
ムアミダブの反又
則又バ子
ムタウの反
反ムウ
ウ
反ムウ
ムハ玉
赤ムンウハフレンケ牛ヤウの反又

スバヨスキ〻〻〻ホメウハフレンケキヤウの友ムヽ〻〻ハヲ天ヽ〻〻叔南無阿彌陀佛〻〻〻
〻〻〻皇国の五ヲ〻〻合〻〻老〻〻〻〻ナム〻〻〻中無の系〻〻〻〻〻空中の水〻〻〻〻〻〻
〻〻〻〻〻〻

窮まるなれども人間は神代身躰堅固にして内より起る病なく外より来る禍なくして天命の数を保天地原水火より發人原水火より生天地水火を今日を生人水火を今日を過て水火を則生て貴哉五十連の水火貴哉生貴哉の五十島

○天地の水火躰用あり躰は現氣の日月より天へ傳て彊に用ひ現陰陽の萬物に限り其人の水火躰用あり躰は現氣の孫へ傳て彊に用ひ現息に音に限て終て天地の水火より日月へ傳て人間の水火より子孫へ傳て天地の日月へ人の水火與世世永世盡て天地の始終に且夕に在神代の大古より今日に至て且夕に終る今より後も亦かくの如し物始て終あらざるなし萬物指て天地萬物に生て天地本氣の形り

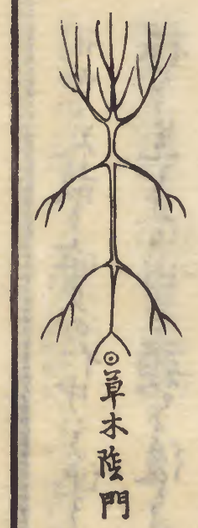
萬物其いくに生て其いくに終て亦始永世始終なくして尽なし萬物に終て天地に終なし水火を知て己に生て己に天地始て終る日月に天地の終て日月共に没す然て己に日月の没て神佛の人に教へて人道の始終に外他に實に天地の初を知て何に實に天地の終を知て何に故に古事記に天地の初のくにより萬物の初に成て實に天地の初發て天道に天地初發に千早振神て誰に知る是を知て神に是を知て人間に吾此天地中に天道水火の

○萬物に皆ヒトにヒに火形にトに與形に則氣水の中に與に生の名に故に且に生に鯨木の下に生て皆火與に處て五十連の水火に團に其形に異て人に五十連の水火

を能備ふ故に能言夷狄言はざる鳥獸音のみを言ふ草木
生ずるを音なし花を總て貴とする在るを人とす
人は花を愛で櫻紅葉を愛し楓月を愛し秋を名とし萬物の長
人と與に樂しむ故に草葉は細き業なれば伐べし
賞ずべき春の来を知る鶯を能時を告鴉を曉を告る友を能門を守る驢
能雨を知る大魚は大魚を友とし小鳥は小鳥を友とし細き是を
花は狂胡蝶叢は這虫を雄は雄を子を産何人にも
なし
○人は鳥獸を己れを敬ひ仕へ侍翔人を出る
を言故に能分鳥獸を出入息を鳴故に其音分る人を
引息は愚を死を知る鳥獸引息は賢を死を

知る能死を知る然して喜怒哀樂の情を通るを言
を知る愚を人は鳥獸も鳴音を言ふ如愚を僻邪を
情を通るを五十連の音を能備るを曽を言を吐次言を
人を人を故萬葉を言字を訓本を訓を言を
人を人を義訓を本言を訓を言を五のを
を訓を

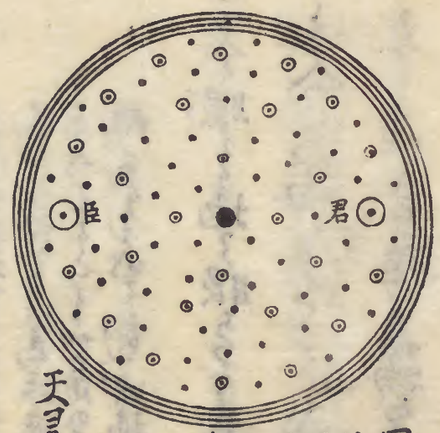
○草木は地を離れ故に生ずる人間を別る人間は股を交合を子
を人草木は枝の股を陽を稟て花咲實人を友那を草木を
倒首して是を根を人間の形同枝を手足を向其図



形如是故實の仁中を通て帯の方を上て生る時胞衣薄皮を人と同く
根を先て出て頭を後て立人間て頭て先て出て足を後て草木
て根を先て出て轉身して根て立人間て胎内て轉て頭て産て轉て
足て立人間て轉て二度て男子て火て宇て先て孕て陽て稟て母の前て向て女子
て水て宇て右て孕て陰て稟て母の背て向男て
陰て陽て御て地て是て稟て天道て故て男交合て子て孕草木て轉て
一度て是て故て女男の名のて交合て孕て

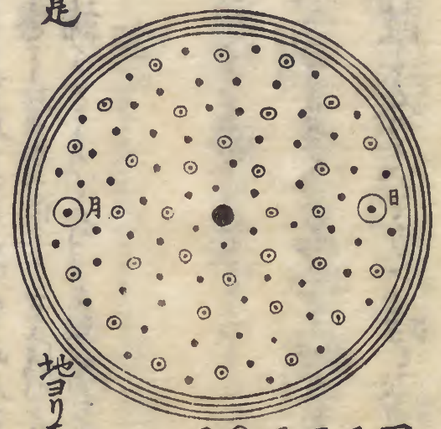
附て曰後世の説て人母胎て在て倒て看て居て男て母の背て向女て母の
前て向て宿て故て男て仰て生て伏て生て仰て生て伏て生て仰て生て伏て生

○以天眼見地之法則



天ヨリ地ヲ見ル賀

○以地眼見天之法則



地ヨリ天ヲ見ル賀

○天眼ヲ以テ天地ヲ別ル見ル事如是亦天地ヲ二ツニ見ル事如是穴ノ形
故ニ阿那ニ入日月星及萬物此穴ノ中ニアリ○ニ十二中の

則⊕那ニ此御形の四ツ真ヲ九十ニ割テ合ル事三百六十
度四分度の一ツ赤道の數ニ入ル穴ニ生出ル穴の中ニ住居シ死ル赤
穴ニ入五躰ヲ赤ニ眼耳鼻口及尿屎の穴乳総ニ穴ニ用ル事
天地の間穴ニ放ル事ヲ草木ニ穴ヲ掃鉢盥茶碗茶柄拘釘針
ニ各穴ヲ入ル躰ヲ見ル事如是亦用ル事ヲ見る
ニ動ク⊙是ヲオノヅカラ起ノ氷ツル氷カラ搦ル氷氣
天地ヲ搦ル自ラ内の水五躰ヲ搦ル三ツカラ同ジ那ニ同ジ和
訓ニ故ニ日月搦ル運行ヲ陰陽搦ル萬物ヲ産搦ル人ヲ産鳥
搦ル和ヲ財寶搦ル融通ヲ搦ル時ニ乱萬事
神ヲ天の⊙ニ

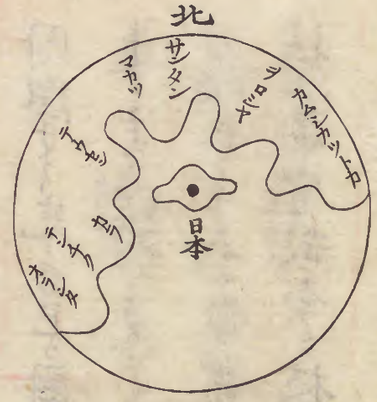
○以天眼見人之法則

此圖ニ著所の◎の正中のゝ天の御手の在の宮ゝ父母の水火の搦初ゝ此五躰ゝ在筋ゝ井の手の搦ゝ手足の節ゝの◎ゝ汝水の淀ゝ渦巻ゝ同ゝ敏ゝ水ゝ輪ゝ則水○ゝ指の頭の◎筋ゝ波の◎ゝ同ゝ鼻の蔓の指の皆指の頭の渦巻ゝ此渦巻の○ゝ水ゝ形ゝ正中のゝ火ゝ則○水火ゝ○ゝ○水火ゝ○ゝ○水火ゝ○ゝ此四の手の與場ゝ御◎ゝ現ゝ故ゝ眼鼻口乳及尿屎の穴ゝ水火ゝ水ゝ火水ゝ見聞言ゝ更ゝ五躰の動ゝ皆此四の手の備の故ゝ此圖ゝ見ゝ天地の神手ゝ身ゝ自在ゝ

○天地の水火ゝ陰ゝ凝ゝ陽ゝ開故ゝ木ゝ綜ゝ北ゝ凝ゝ木理ゝ南ゝ太形ゝ其形◎如是此故ゝ接木ゝ理の大ゝ接木植ゝ陽の方ゝ陽ゝ

方角を知るにも木を伐るにも木の凝方を北知る木理の太るを南に寄る
人の水人も背の方に凝る前に太故に同毛に背の方に凝て額の太る
甚形◎是故に人の凝所を背に付五臓を背に付骨を前に膓に
しるに骨をもちひる人の行も既に背の方に骨に屢前に進むに寄る
背に鎖る前に開る山背の國名山を背に負の名に天道の水に陰に
凝て陽に開の謂に一世界の國土を陰に凝て陽に開故に萬國西北の
方に凝て東南の方に國に海原澈に人の腹の

◎萬國方位之圖



◎北辰方位之圖

此圖中の黒に日本の國に相當萬國の正中にて地心の
謂に天に天心の謂に當に北辰に人に
謂に同毛の正中に當に人心の木に謂て木
理の正中に當に木心の故に萬國を離る
一ふ國に於熊碁呂島の名に天地世界万物
の正中に位に甚形矢に故にヤマトの國に天地
開闢萬物生その初に宰の名に北に萬國に
負に山を背に月に山背の國名に矢的の
に天の御中主神の御に天照大神の鎮座に
伊勢國に於て山を前に抱てヤマトの名を那す山に前の
山田の鎮坐に前に山在て後に山に
二見浦に日月兩帝を拜名日本の木に此地に在天子神明を拜する時に
北面に其山に背に月に負に則山背月の氣に神明に
日本の王天在て天子に山背の王より桓武帝都を山背
国に定給に謹に考に天子日に神拜に
の氣に每一誠に神明の鎮座帝都の王相和に
天地に共に内躬每に忘る此地に相給に神に哉
附に伊勢の朝熊山八朝暈の山に虚空藏尊八虚空に花の氣に
日の大神空中に藏して朝に暈に用て二見浦に日月兩帝現給ふ
氣に名八人間にして天眼にして見に付八神佛表裏に

○天地の理を知らむと欲せば己を知る在故學ぶ遠く非先己が母胎を
出でを初めて出で息するを知水火するを知て言を知て言を知
詞て吾國の書籍を教えを知胎内に神靈の在を
知て然れば身を脩るを知學の終まで學ぶ己に在て他に求ること己を知
て天地を明らむ己を脩て人倫を正ふ
入て欲せば其國の學ぶに先まず皇國の人儒佛の學に入ること欲せば心
國學に先まず己が國を本として他の國を末とす道に泥て漢學に心を
走て漢國を見ざる漢人國學に暗て皇國に生て皇國の人を非
其根正しからんや枝葉全からんや既舎人親王日神道者根也儒佛兩道者
枝葉也宜哉今に枝葉繁茂して其根を忘る

四ノ二十一終

国立公文書館
National Archives of Japan